# かささぎ通信　第132号

毎月第２金曜日 13：30～15：30　　2024年　1月　12日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」


**２０２３年１２月の「森三郎の作品を読む会」では、「山彦」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）と「銀作」（『赤い鳥』１９３３年５月号所収作）を読みました。**

「山彦」は刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集かささぎ物語』（１９９５年）所収作で、本会では一度読み合わせたことがあります（参照「かささぎ」通信第８０号）。これは明日見山の麓の村の長者の娘・乙姫が、山の上に住むという炭焼きの山彦と結婚するまでの話です。今回は父親の娘に対する望みと、娘の結婚観とが話題の中心になりました。

妻を亡くして娘と二人で住む年取った父親は、乙姫にいいお婿さんを見つけて、自分は隠居をしたいと思っていました。しかし父親のたっての願いに対し、乙姫は炭焼きの山彦となら結婚しても良いと答えます。ところが山の上まで迎えに行っても山彦は姿を現さないで、使いの者たちの声を真似するばかりでした。そこで乙姫は自分の方から明日見山の上の山彦の所へ嫁に行きます。

初め、父親は娘に婿を貰って一緒に住むことを当然のことと考えて、結婚させようとしました。お婿さん候補の中の一番優れた人と結婚し安心させてくれと娘に頼みます。父親は娘の結婚で自分が安心したいということに重きを置いています。炭焼きとの結婚を言い出された時も、とにかく結婚する気になったならと大喜びします。ところが娘が炭焼きと結婚するために遥か遠くの山の上に行く決心を示すと、今度はにわかに「一生一人でいたっていいのだから、家にいておくれ」と言います。父親は、長者である自分の娘との結婚を望まない者などいるはずがないという前提で事を進め、またそれが当然娘の幸せだと思い込んでいたのでしょう。

一方娘は、長者の娘だからといって寄ってくる男たちに対しては「自分の心まで汚れる思ひがします」と拒否します。そして迎えに行っても現れない山彦に対して「面倒な人間の世をさけて姿を見せない」のだと考え、功利とは無関係に自然の中で炭を焼く山彦と共に暮らす道を選びます。父親に対しては「どうぞ私のことはあきらめて」と言っていますから、愛情深く育てられたことに感謝していることは分かります。

森三郎はこの父親のエゴをそのままにはしませんでした。娘の決心の固いのを見て泣く泣くあきらめ、立派な嫁入り支度を整え、娘を送り出します。そしてある日、一人で山へ訪ねて行きますが、会えない娘夫婦に向かって「達者でお暮らし」と声をかけて山を下りてきます。その背中に同じ声で「達者でお暮らし」と山彦が帰ってきます。前近代的な結婚観の主流である戦中に書かれた作品ですが、最後にはこの長者を、まっすぐに立ち上る炭焼きの煙を見て二人の永遠の幸せを信じる父親像に変化させています。三郎三十二歳の作品です。

これより十年前に書かれた『赤い鳥』掲載作「銀作」は、江戸時代の寺子屋を舞台にして、十二歳の子どもたちがいたずらをして、手習いの筆の墨が掛け軸についてしまいます。初めに墨の付いた筆でいたずらをした竹松、仕返しをしているうちに掛け軸に墨をつけてしまった千代吉、それぞれ青くなったり泣いたりして、後悔します。そのうちに竹松は小刀でそっと墨を削り取ったらどうかと思いつきますが、そんな都合よくはいきません。千代吉の従兄の銀作は身分が低いながらも侍の子なので小刀を差していましたが、侍のたましいというべき小刀をそんなことに使ってはいけない、いや千代吉を助けるべきだと揺れ動きます。竹松が自分で謝りにいくと言った時にお師匠さんが戻ってきました。何もすることが出来なかった銀作は自分をひきょうものと後悔の念にかられます。それぞれの立場の子どもの気持ちがよく描かれています。

**予告**　**森三郎の作品を読む会会誌『かささぎ』第６号**

**２０２４年２月下旬　発行予定　〈内容〉「作品を読む会」での勉強の報告、森三郎の生涯についての発表など盛りだくさんです。酒井晶代先生からは森三郎の新しい作品発見の報告もあります。**

**〈次回予定〉　２０２４年２月９日（金）午後一時半～三時半**

**・「春（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）**

**・「あのころ」（『赤い鳥』１９３３．５）**